

# 史標 63

O. D. A.「史標」出版局

2019年3月号

"SHIHYOU" 63

March 2019 (published 31st March 2019)

ISSN 1345-0522

Editorial board: Yuya OWA, Keisuke TAKADA

Laboratory of Architectural History

School of Creative Science and Engineering, Waseda University

O. D. A. "SHIHYOU" publishing

Room 8F-10, Okubo 3-4-1, Shinjuku, Tokyo 169-8555

TEL: 03-5286-3275

FAX: 03-3204-5486

Mail Address: shihyo@lah-waseda.jp

目次  
Contents

\* \* \* \* \*

住宅遺構における柱面と「面砕」との関係 pp. 1-10  
Relationship between chamfering in housing remains and "Menkudaki" 小岩正樹研究室 修士 2 年 関根康季

われた中世港町草戸千軒を訪ねて pp. 11-16  
Visited a lost medieval port city "Kusado-senken" 小岩正樹研究室 博士後期課程 1 年 伊藤瑞季

\* \* \* \* \*

執筆者略歴、執筆後記

お知らせ

# 住宅遺構における柱面と「面砕」との関係

## Relationship between chamfering in housing remains and "Menkudaki"

小岩正樹研究室 修士課程2年 関根康季

### 0. はじめに

筆者は修士論文において住宅木割において展開される「面砕(設計理論)」の変遷過程と、大工道具や中・近世の住宅遺構を「設計の実践」として捉え、その関係性に関して考察を行った。本稿では、「設計の実践」に関する考察を中心に扱いながら、木割書との関係性に関して示唆したいと思う。

### 1. 面砕について

まず、住宅建築の設計理論の核となる「面砕」を本稿の前提条件として纏めることとする。『匠明』をはじめ多くの住宅木割書では柱径・面内・片面落とし・面表・面といった柱径と面の関係から各部材寸法を決定する「面砕」による設計手法が展開されていることが知られている<sup>1</sup>。更に特筆すべきこととしては、近世以降の住宅木割では、「各部材寸法の決定に用いる面(基準面)」と「実際に柱にとる面(実柱面)」の2種類が存在していることである。先行研究においては「面砕」の変遷に関して、7面取・10面取・14面取といったように木割書の記述から算出される数値にのみ注目して扱っているが、用いられる記述表現に注目すると、同じ箇所を示す「大面(タイメン)」と「面内」では前者の方が相対的に古い表現であることが分かった。『匠用小割』(1677-1710)に代表されるように、「面砕」においてその規定方法を基準面によって多くを包括しようとする潮流を前提として考えた時、この記述表現の変化にも、柱面の重要性が増していることをみてとることが出来るであろう。

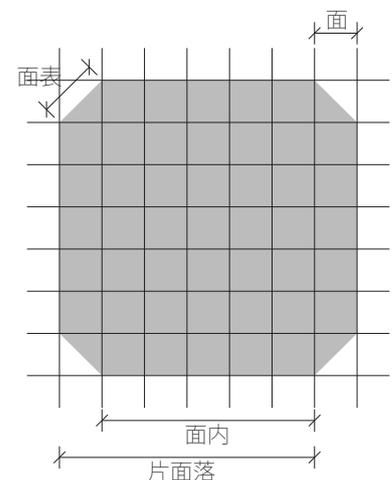


図1 面砕の概要

表1 大面・面内に対応する表現

木割書	年代	表現
『三代巻』	1489	大面
『林家木割書 4冊の1』	1577	タイメン
『(今福彦兵衛伝来目録)』	1607	大めん
『匠明』	1608	面内
『小林家史料』	1614-15	大めんのうち
『(竹内右兵衛書つけ)』	1638-54	面内
『新編武家雛形』	1655	面内
『鎌倉造営名目』	1676	大めん
『柏木家秘伝書』	1689	面内
『匠用小割』	1677-1710	面内
『新編拾遺大工規矩尺集』	1700	大めんのうち

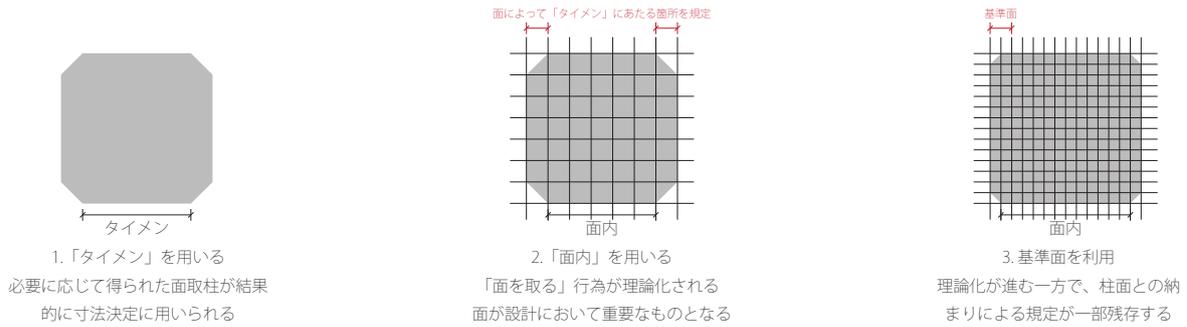


図 2 表現に注目した「面砕」の変遷

## 2. 当時の大工道具と施工精度に関して - 中世における台鉋 -

柱面を実際に施工する際には角柱を鉋によって削り、面を取る。その為、遺構における面に関して検討する上で、当時の道具に関しての言及が必要となるであろう。大工道具に関しては渡邊晶氏が詳細な研究を行っており<sup>2</sup>、それを参照しながら、当時の施工精度に関して考えてみたい。

まず、中世における台鉋の使用に関して、渡邊氏は、平面切削用の台鉋の使用時期を化粧材に平滑で美しい仕上げ面を求めるようになった時期から推定している。その中で、意匠面での台鉋の導入の契機については、比較的明るい空間で、化粧材が人の目にふれる機会も多い住宅建築に見出している。美術品を飾り鑑賞する為の構えとして発展してきた書院造の座敷飾り(押板・付書院・棚)の発生が 15 世紀、定型化が 16 世紀後半であることと、15 世紀中頃に出現し 16 世紀から 17 世紀にかけて普及がなされたとされる台鉋の普及時期が一致していることがその背景であり、美術品の展示空間ともいべき座敷飾り構成部材には部材表面の美しさや部材相互の接合部の緊密さも要求され、台鉋が必要不可欠であったと渡邊氏は論じている。

このような美的・意匠的観点だけではなく、設計図などを用いた建築工事の高度な計画化が可能となった時期からも台鉋の使用時期を考察している。新築工事において部材に番付が使われるようになった例として 15 世紀初め、本格的な設計図として残っている最古の例は 16 世紀中頃であることなどを勘案しても、台鉋の使用契機を 15 世紀と想定している。

また、本研究を進めるにあたり、住宅遺構における面取の仕上げに関して報告書を通して調査を行ったが、1486 年建立の東求堂においても当初材の柱において台鉋を用いていることが確認されたことから、15 世紀末には住宅建築において台鉋が用いられていたとして良いであろう。一方で、建立時期が園城寺光浄院客殿や勸学院客殿とほぼ同時期であることが推定されている護国寺月光殿では明治期及び昭和期の柱仕上げに関しては台鉋としているものの、当初材に関しては「明確な槍鉋の刃跡は見られないが、表面は完全な平滑面でもない」という調査結果も残されている<sup>3</sup>。このことから、時代的には正確な仕上げを施すことが可能でありながらも、完全には普及していなかった可能性が指摘できるであろう。

### 3. 当時の大工道具と施工精度に関して - 近世における台鉋 -

渡邊氏は近世における鉋に関して『和漢三才図会』(1712) 及び『和漢船用集』(1761) を文献史料として扱っている。『和漢船用集』では鉋に関して 10 種類の項目が挙げられているが、その中の 1 つに「面取」という項目があることが注目され、「面取 至て小なる者鉋の幅六七分一寸に至る面をとるに用ル者也」という記述と共に面取鉋の絵が記されている。つまり、18 世紀中頃においては柱の面取に特化された鉋が用いられていたこととなり、単純に台鉋を用いて仕上げを行うよりも精度の高い施工が可能であったであろう。

さらに渡邊氏は京都伏見の御香宮境内にある桃山天満宮で保管されてきた大工道具の中に含まれた鉋 7 点に関して実測図を記しながら検討を行っており、その中に定規台とそこに嵌め込む小鉋で構成された鉋に関して報告している。渡邊氏は『和漢船用集』に記された面取及び、伝世している面取を比較することで以下のような変遷の可能性を推測している<sup>4</sup>。

「近世の実物史料(伝世品)の中に、定規付の「面取」があるが、この挿図にある「面取」の台頭・台尻部分を短く切断して定規を取り付ければその形状への移行が可能となる。『船用集』記載の「面取」はその移行前の形状を示していると考えられる。」

面取鉋の形状変遷に関しては推測の域を出るものではないが、『和漢船用集』に著わされた記述からは、18 世紀中頃までにはより正確な面を施そうとする試みがあったことは指摘できるであろう。以上のこ

とから、鉋に関する変遷は図 4 のように想定されるであろう。

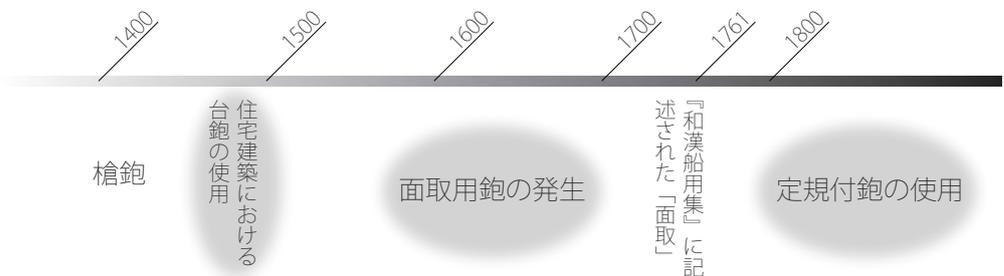


図 4 鉋の変遷

### 4. 住宅遺構における面取

ここから、実際の遺構における面取に関して扱う。対象とした遺構における面取は表 2 のように纏められる。これをみれば、面取の値にばらつきが生じていることが分かる。この散布からは前節で述べたように面取の寸法が誤差を含むものであったとしても、理想値が木割書に表れるような 7・10・14 面取のみを志向していたとは断言できず、これらの関数値以外の面取も住宅建築の設計手法に存在していたと考えた方が妥当であろう。

次に、『匠明』など多くの木割書が表されるのが 17 世紀以降であることから、1600 年を境として、その前後における特徴を見出してみたい。中世以降においては、面取の値が 7 面取～10 面取に集中していることが見て取れる。例外として犬山城初層の面取率 19.03 が挙げられる。しかし、柱径が 0.78 尺、柱面見付幅が 0.04 尺であることに注目すると、他遺構と寸法値としては変わらないことが分かる。

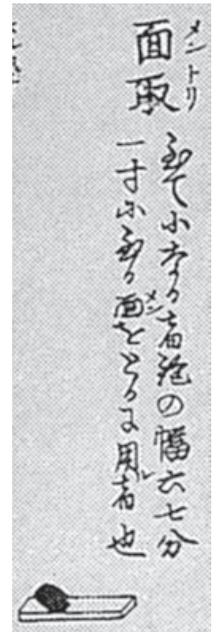


図 3 『和漢船用集』に記された面取

表2 遺構における面取(薄字に関しては報告書図面の手測によって算出)

遺構	所在	建立年	柱径(尺)	面内(尺)	面(尺)	面取率
龍吟庵方丈	京都	転用	0.45	0.33	0.06	7.50
龍吟庵方丈	京都	鎌倉	0.50	0.37	0.07	7.69
龍吟庵方丈	京都	鎌倉	0.47	0.34	0.07	7.23
吉水神社書院	奈良	1336	0.41	0.31	0.05	8.48
吉水神社書院	奈良	1336	0.39	0.28	0.05	7.31
吉水神社書院	奈良	1336	0.33	0.24	0.05	7.21
吉水神社書院	奈良	1336	0.33	0.23	0.05	6.83
龍吟庵方丈	京都	嘉慶	0.46	0.34	0.06	7.67
法隆寺太子殿客殿	奈良	室町中期/1816改築	0.41	0.32	0.04	9.26
今西家書院	奈良	室町中期	0.41	0.31	0.05	8.50
東求堂	京都	1486	0.38	0.31	0.04	10.13
銀閣	京都	1489	0.38	0.31	0.04	10.45
銀閣	京都	1489	0.34	0.28	0.03	10.40
大仙院方丈	京都	1513	0.43	0.35	0.04	10.75
大仙院方丈	京都	1513	0.46	0.37	0.05	10.22
龍源院本堂	京都	前身建物	0.40	0.32	0.04	10.00
龍源院本堂	京都	1517	0.55	0.44	0.06	10.00
龍源院本堂	京都	1517	0.48	0.38	0.05	9.60
犬山城初層	愛知	1537	0.78	0.70	0.04	19.03
瑞峯院本堂	京都	1552-1557	0.45	0.34	0.06	8.18
黄梅院本堂	京都	1588	0.63	0.51	0.06	10.64
黄梅院本堂	京都	1588	0.73	0.59	0.07	10.43
龍吟庵方丈	京都	桃山	0.45	0.34	0.06	8.18
吉水神社書院 <sup>5</sup>	奈良	桃山	0.38	0.31	0.04	10.45
吉水神社書院	奈良	桃山	0.30	0.24	0.03	11.25
吉水神社書院	奈良	桃山	0.40	0.33	0.04	11.09
吉水神社書院	奈良	桃山	0.36	0.29	0.04	10.00
吉水神社書院	奈良	桃山	0.40	0.32	0.04	10.91
三宝院表書院	京都	1598	0.40	0.35	0.03	16.00
園城寺勸学院客殿	滋賀	1600	0.52	0.40	0.06	8.67
園城寺光浄院客殿	滋賀	1601	0.50	0.41	0.05	11.11
妙心寺退蔵院方丈	京都	1602	0.48	0.39	0.04	10.95
妙心寺小方丈	京都	1603	0.50	0.41	0.05	11.03
護国寺月光殿	東京	1601-1610頃	0.50	0.43	0.04	13.89
護国寺月光殿	東京	1601-1610頃	0.33	0.28	0.02	13.90
観智院客殿	京都	1605	0.42	0.33	0.05	9.20
瑞巖寺方丈 <sup>6</sup>	宮城	1609	0.72	0.63	0.04	16.07
瑞巖寺方丈	宮城	1609	0.84	0.73	0.06	14.22
瑞巖寺方丈	宮城	1609	1.06	0.92	0.07	16.00
大仙院書院	京都	1614	0.40	0.34	0.03	13.44
円満院宸殿	滋賀	1619造営/1647移築	0.48	0.38	0.05	9.60
円満院宸殿	滋賀	1619造営/1647移築	0.55	0.43	0.06	9.17
妙法院大書院	京都	1619	0.52	0.42	0.05	11.01
観音寺書院	滋賀	江戸初期	0.37	0.32	0.03	14.80
本願寺白書院	京都	1624	0.72	0.62	0.05	13.71
竜光院密庵	京都	江戸時代前期	0.37	0.33	0.02	18.50
竜光院密庵	京都	江戸時代前期	0.42	0.36	0.03	14.00
竜光院密庵	京都	江戸時代前期	0.45	0.40	0.03	18.00
本願寺白書院	京都	1624	0.82	0.69	0.07	12.62
本願寺白書院	京都	1624	0.62	0.54	0.04	15.50
二条城二之丸諸殿舎	京都	1626-1626	0.80	0.66	0.07	11.43
二条城二之丸諸殿舎	京都	1626-1626	0.90	0.72	0.09	10.00
曼殊院書院	京都	明暦 1655-1658	0.41	0.40	0.01	54.67
龍吟庵方丈	京都	寛文	0.44	0.35	0.05	9.78
龍吟庵方丈	京都	寛文	0.45	0.37	0.04	11.25
曼陀羅寺書院	愛知	1667	0.48	0.42	0.03	16.11
円教寺寿量院中門・広縁・客間	兵庫	1688	0.48	0.40	0.04	12.00
円教寺寿量院背面居間	兵庫	1688	0.42	0.35	0.04	12.00
円教寺寿量院台所・茶の間	兵庫	1688	0.60	0.50	0.05	12.00
龍吟庵方丈	京都	貞享 1684-1688	0.47	0.34	0.07	7.23
法隆寺太子殿客殿	奈良	1783.00	0.39	0.30	0.04	9.36
龍吟庵方丈	京都	寛政 1789-1801	0.46	0.41	0.03	18.40
龍吟庵方丈	京都	寛政 1789-1801	0.45	0.38	0.04	12.86
龍吟庵方丈	京都	文化 1808-1818	0.49	0.46	0.02	32.67
法隆寺太子殿客殿	奈良	1816.00	0.41	0.32	0.04	9.11

また、中世遺構と近世遺構遺構を比較すると、面取の値が多様化していることが分かる。標準偏差として評価すると、中世では 2.48、近世では 8.15 であり数値の分散を指摘できるだろう。面取率だけでなく、面見付幅の実寸値に関してみても、近世になると細い寸法値が増えていることが分かるだろう (図6)。

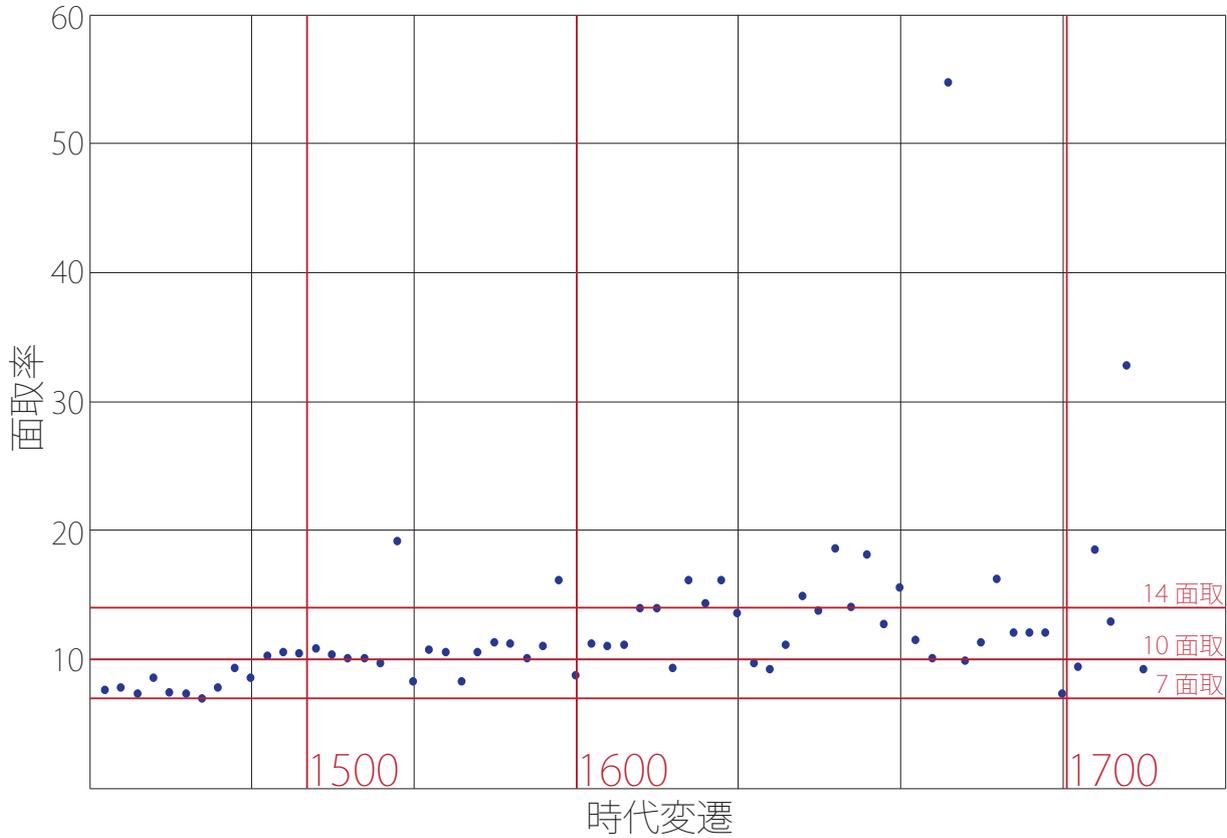


図5 遺構における面取率と時代変遷の関係

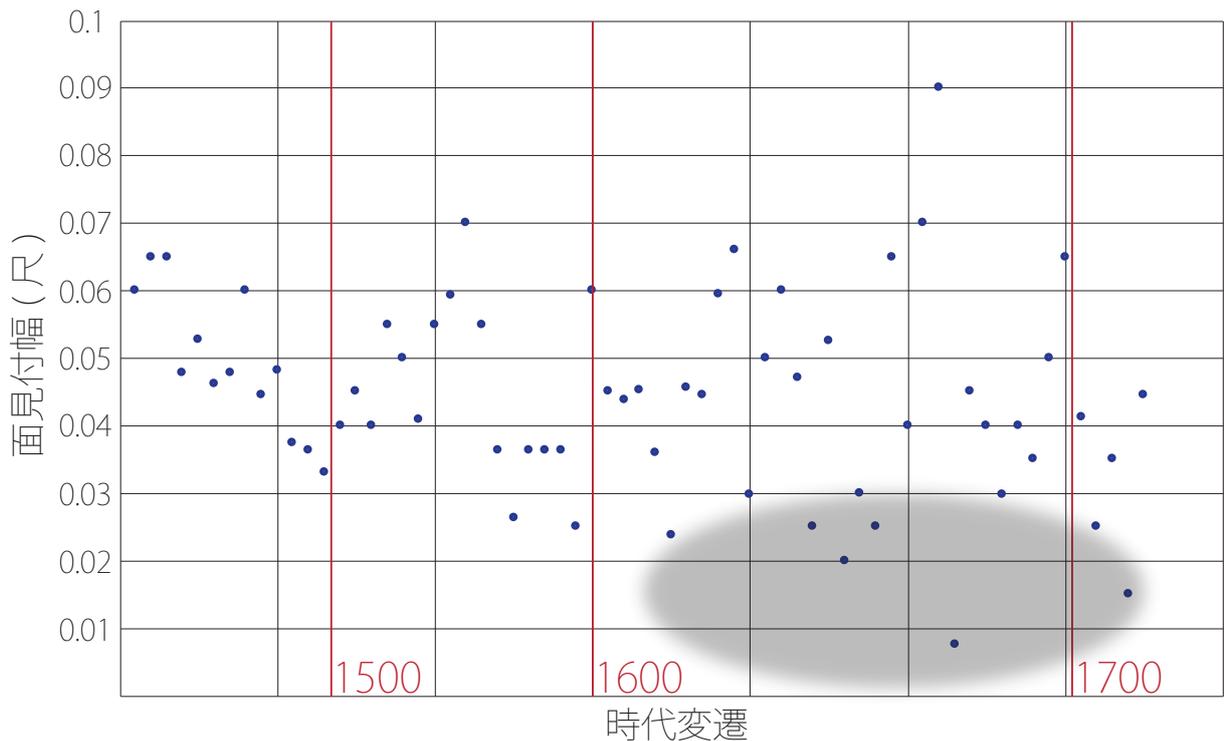


図6 遺構における面見付幅と時代変遷の関係

## 5. 室内構成要素の納まりと柱面との関係

対象としている遺構において、書院造の様式を構成する要素における柱面の影響を確認する。遺構のうち、報告書の図面の精度を考慮した時、複数の遺構において、地板や棚板の取付位置に関して柱面が基準となっていた可能性を指摘することができる。

木割書との比較をすると、『匠明』では面表1つ、『(竹内右兵衛書つけ)』や『新編武家雛形』では面1つ分として地板の位置を規定している。遺構においては、数値は木割書とは異なるが、柱面によって位置決定を行なっていることは明らかであろう。また、中世遺構である東求堂においても書院及び違棚の地板で面による位置決定をしており、棚板の厚さに関して面を基準としている可能性が高いことが分かった。従って、木割書によって体系化される以前から柱面を用いた設計が行われていた可能性が高いであろう。

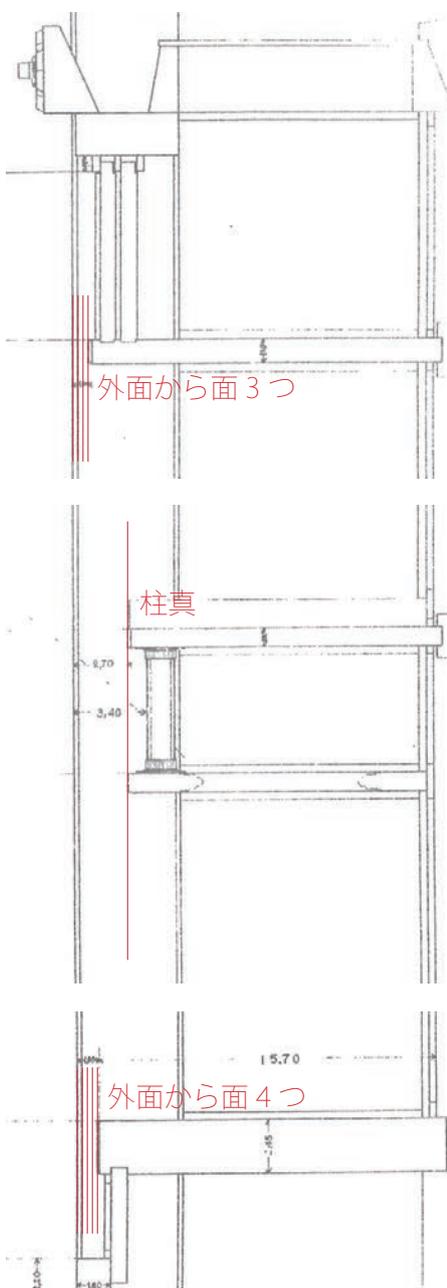


図7 円満院違棚納まり

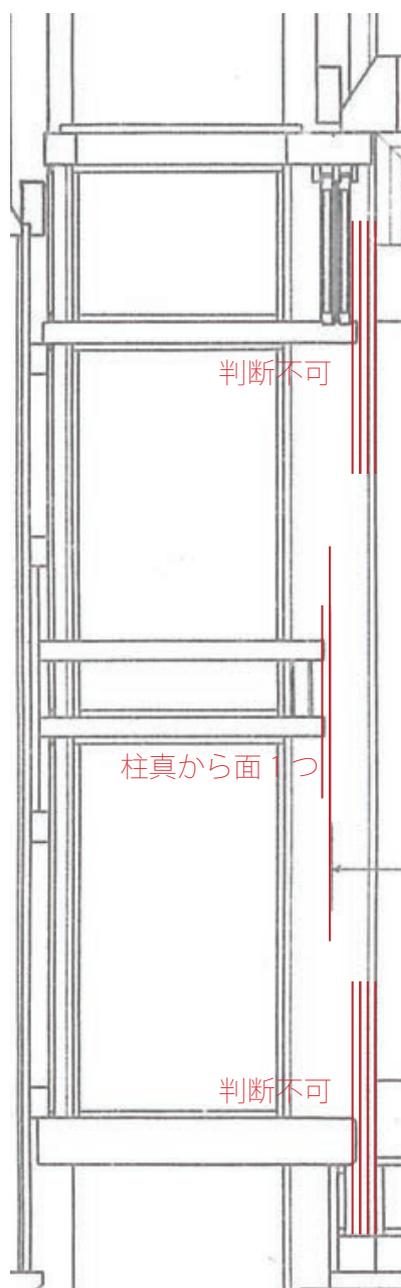


図8 光浄院客殿違棚納まり

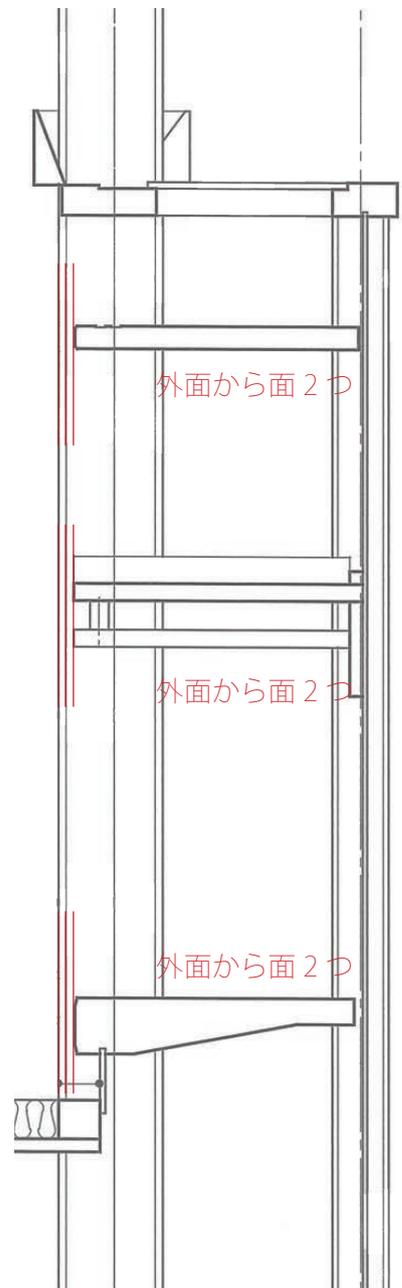


図9 瑞巖寺上々段違棚納まり

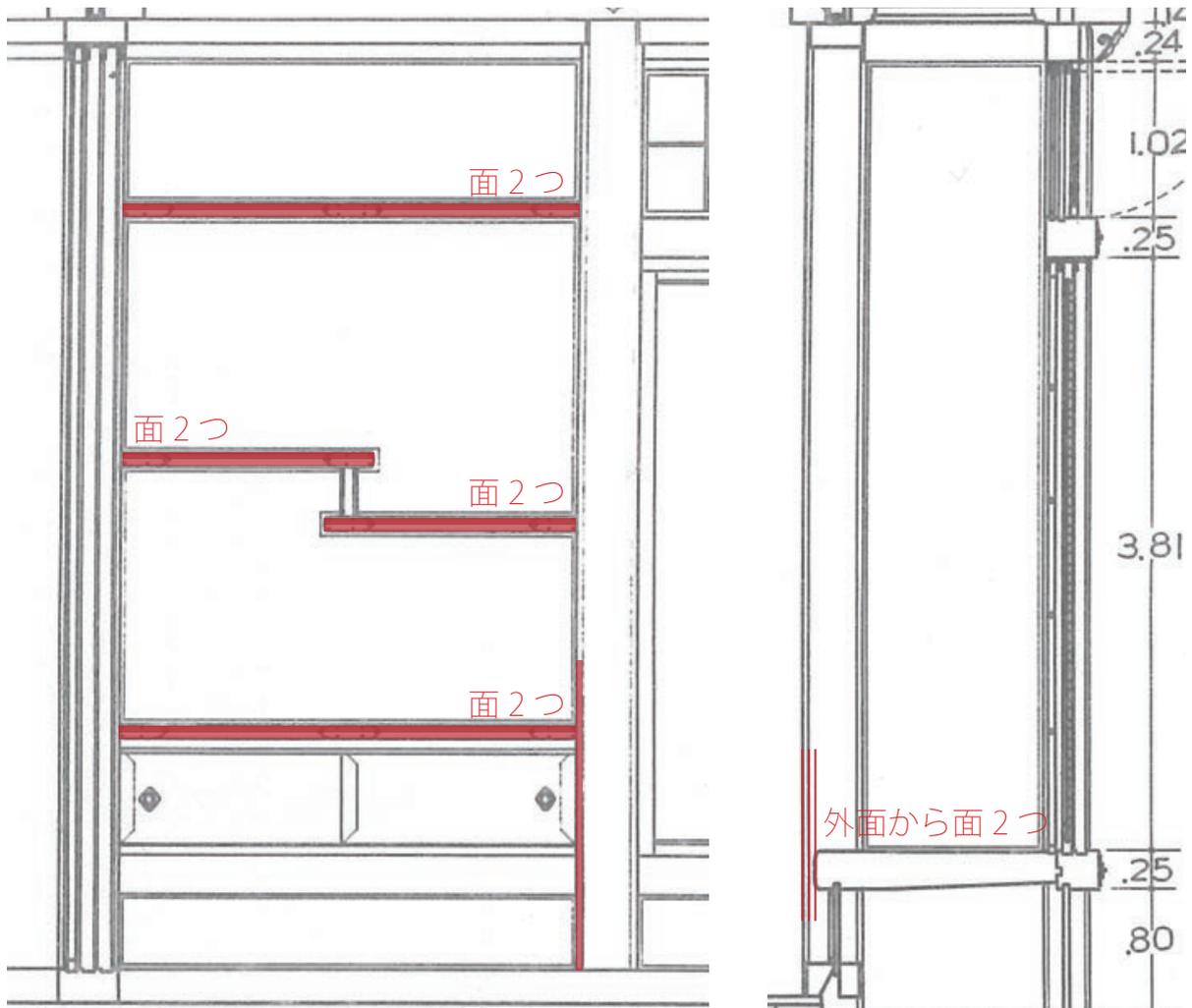


図10 東求堂違棚と柱面との関係

## 6. 仕口との関係

複数の報告書において、仕口と柱面の関係が指摘されている為、ここに纏める。本願寺白書院では地長押と柱の取付において柱面に合わせるように組んでいる例が報告書で指摘されている<sup>7</sup>。また、龍源院本堂では長押の仕口である襟輪欠を面内までとるといった技法も報告されている<sup>8</sup>。さらに、今西家書院では、当初柱の実測図が描かれており、当初の仕口に関して報告されている<sup>9</sup>。この図からは、柱に対する切り欠きが柱面と合わせているものが複数確認することができた。

仕口の詳細に関しては報告書で報告されている例が少なく、全ての遺構において一般化することはできないが、少なくとも柱面が意匠的な要素のみならず、仕口にも影響を与えていた可能性は指摘できるだろう。

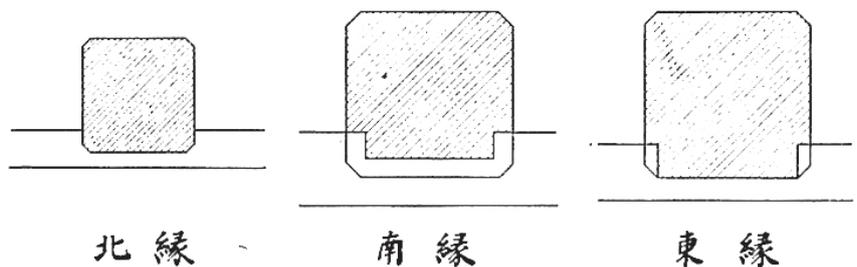


図11 本願寺白書院における地長押と柱の取付

## 7. 住宅遺構以前の柱面と設計との関係

住宅遺構が残されているのは、14 世紀以降であり、それ以前の状況に関しては定かではない。しかし、住宅遺構以外においても面取を施した角柱が用いられる例は確認でき、具体的には平等院鳳凰堂 (1052) が挙げられるだろう。鳳凰堂では、身舎柱・裳階柱いずれの上にも大斗が取り付くが、これらの寸法分析から、角柱の面取の意義に関して考察したい。

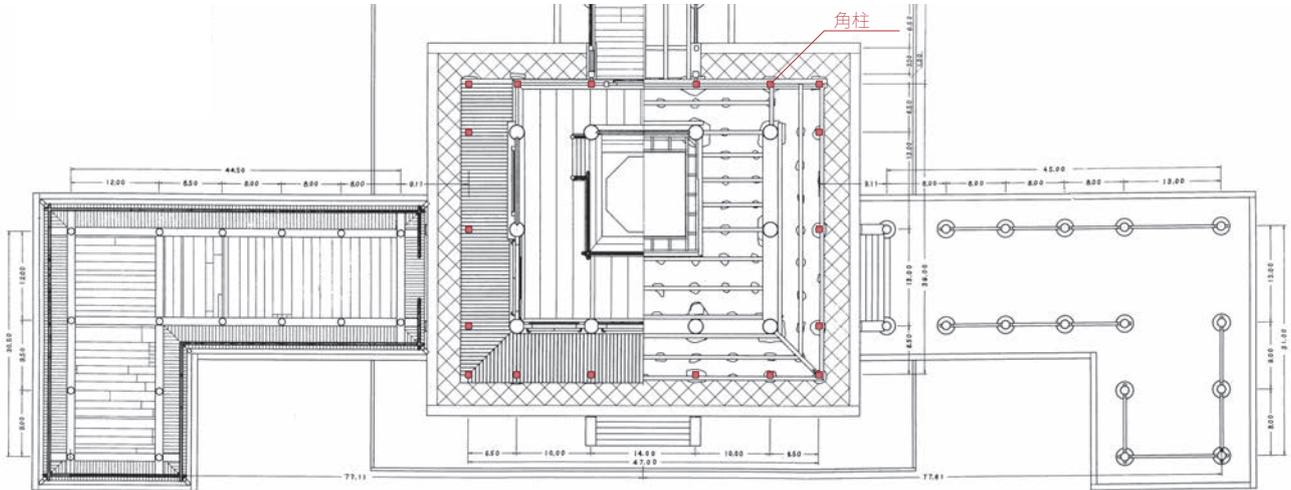
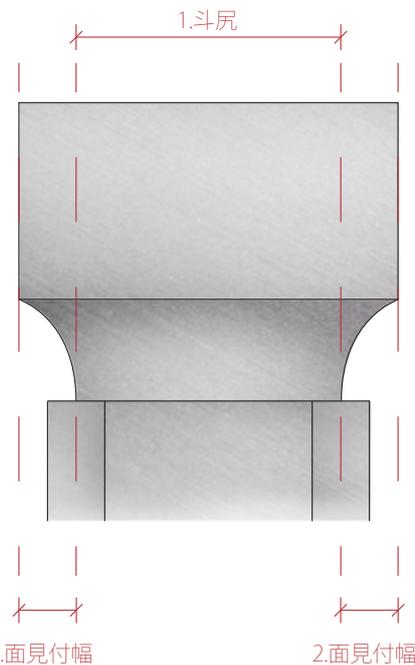


図 12 平等院鳳凰堂裳階柱の位置

身舎柱径の柱頂上部の寸法が 1.775 ~ 1.85 尺である為<sup>10</sup> 身舎柱と大斗幅の比率は、大斗がほぼ同寸或いは少し同寸となる。一方で、裳階柱と大斗の関係は大斗の方が裳階柱よりも大きくなる。また、図の比較からも、立面のプロポーションが異なることは明らかであろう。

裳階柱と大斗の寸法に注目すると、斗尻幅が 0.68 尺、大斗幅 0.98 尺、面付幅が 0.15 尺である。これらの寸法関係を考えると、斗尻幅の寸法に面見付幅を両側に 2 つ加えることで大斗の寸法値となることが分かる。鳳凰堂が建立された当時の大斗の設計手法に関しては明らかではない為、断言することはできないが、大斗幅寸法が裳階柱とその面取から算出されている可能性も寸法上はありうるであろう。

鳳凰堂は丸柱を主体として構成されている為、建築全体に対して裳階の面取柱が影響を与えているとは考え難いが、少なくとも裳階に取り付く部材に関しては影響していた可能性があるだろう。



1. 面内にあたる部分から面見付半分ずつ加えて斗尻とする
2. 斗尻に面見付幅を両側に加える

図 13 大斗の寸法決定手順の推定

## 8. 木割書における「面砕」との関係に関する考察

ここまで、大工道具や遺構といった実践的側面に関して扱ってきたが、その変遷に関して推定した上で、木割書の表現との関係性に関して考えてみたい。

木割書が記される遙か以前の12世紀頃から柱面に対して「納める」という感覚が存在していた可能性もあるだろう。しかし、この段階では、柱径・面取率いずれも大きいものであった。

大工道具の変遷と、住宅遺構の変遷を鑑みると、中世において台鉋が導入され、柱面取の精度が向上したことで住宅遺構にみられるような細い柱に対しても面取を基準とした部材の位置決定や部材の寸法決定など、柱面に対して「納める」という感覚が生じたのではないだろうか。

その後、住宅遺構の分析を通して見出された近世における柱面の多様化や、見付幅がより細かい面取ができるようになった事は、近世に至って大工道具の精度が向上したことを示唆しているのではないだろうか。面取鉋が発生した時期が近世初期であると考えられることも、それを裏付けるであろう。

冒頭で、木割書における「面砕」の変遷過程に関して指摘したが、中世の特に15～16世紀において面取柱を用いた設計が行われつつあるものの、「面」そのものの重要性は低かった。それが近世に至って「面取」が理論化され、「面」が基準寸法として運用されるようになった。

この変遷過程を実践的側面の変遷と照らし合わせてみた時、変化過程が相関関係にあることが分かるだろう。施工精度の向上という実践的要素によって面砕が理論として活用できるようになったといえるのではないだろうか。

## 9. まとめ

中世において、柱面は設計理論にまで至るものではなかったが、施された面に対して「納める」という感覚は存在していた。それは意匠的観点のみならず仕口にまで影響し、設計の実践に依存した手法であったと言える。近世に至り、さらなる施工精度が実現可能となったことで理論としての「面砕」が完成され、木割書においても面取の規定がなされるようになったと考えられる。その後、住宅木割は基準面を用いた理論体系を完成させていく。面砕は実践的精度の向上によって完成された理論であり、実践的要素に依存し、変化に呼応して記述されたと考えられる。

<注釈>

注1…河津優司「住宅木割書の研究:その10「七めん」について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会 1990.10 など

注2…渡邊晶『日本建築技術史の研究-大工道具の発達史-』中央公論美術出版 2004

注3…『重要文化財 護国寺月光殿(旧日光院客殿)保存修理工事報告書』文化財建造物保存技術協会 2014 p.81

注4…渡邊晶『日本建築技術史の研究-大工道具の発達史-』中央公論美術出版 2004 p.304

注5…吉水神社書院に関しては『重要文化財吉水神社書院修理工事報告書』で推定されている年代で記載している。

注6…瑞巖寺に関しては『国宝 瑞巖寺本堂ほか7棟保存修理工事報告書』では全ての柱の実測を行なっているが、ここでは報告書で計画寸法と推定されている0.7尺、0.84尺、1.5尺にもっとも近い寸法値の柱を記載している。

注7…『国宝本願寺書院(対面所及び白書院)修理工事報告書』京都府教育庁文化財保護課 1959.7 p.26

注8…『重要文化財龍源院本堂・附玄関・表門修理工事報告書』京都府教育庁文化財保護課 1966.12 p.22

注9…『重要文化財書院修理工事報告書』奈良県教育委員会 1979.12 p.19-20

注 10…『国寶 平等院鳳凰堂修理工事報告書』京都府教育廳文化財保護課 1957.3 p.82

< 参考文献 >

河津優司「住宅木割書の研究 その 7 面砕と丸柱」『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会 1986.8

山崎純「屋敷雛形にみる日本古典住宅建築学の成立過程に関する研究」東京工業大学博士論文 1999

吉田周平「木砕きにおける「面」の概念について」名城大学修士論文 2013

渡邊晶『日本建築技術史の研究 - 大工道具の発達史 -』中央公論美術出版 2004.2

遺構分析として扱った報告書に関しては以下に纏める。

扱った住宅遺構報告書リスト

報告書名	出版	出版年
『重要文化財円教寺寿量院修理工事報告書』	重要文化財円教寺寿量院修理委員会	1967.12
『国宝犬山城天守修理工事報告書』	国宝犬山城天守修理委員会	1965.8
『重要文化財瑞峯院本堂附玄閣及び表門修理工事報告書』	京都府教育庁指導部文化財保護課	1974.9
『重要文化財曼殊院書院修理工事報告書』	京都府教育庁文化財保護課 重要文化財曼殊院書院修理事務所	1953.3
『国宝瑞巖寺本堂ほか 7 棟保存修理工事報告書』	公益財団法人 文化財建造物保存技術協会	2018.3
『重要文化財書院修理工事報告書』	奈良県教育委員会	1979.12
『国宝観智院客殿修理工事報告書』	京都府教育庁指導部文化財保護課	2016.10
『重要文化財退蔵院本堂附玄閣修理工事報告書』	京都府教育庁指導部文化財保護課	1974.9
『重要文化財龍源院本堂・附玄閣・表門修理工事報告書』	京都府教育庁文化財保護課	1966.12
『国宝本願寺書院(対面所及び白書院)修理工事報告書』	京都府教育庁文化財保護課	1959.7
『重要文化財竜吟庵方丈修理工事報告書』	京都府教育庁指導部文化財保護課	1962.6
『重要文化財法隆寺北室院太子殿他三棟修理工事報告書』	奈良県教育委員会事務局 奈良県文化財保存事務所	1968.6
『重要文化財吉水神社書院修理工事報告書』	奈良県教育委員会事務局 奈良県文化財保存事務所	1972.11
『国宝慈照寺銀閣修理工事報告書』	京都府教育庁指導部文化財保護課	2010.12
『重要文化財大仙院書院修理工事報告書』	京都府教育庁指導部文化財保護課	1972.3
『国宝並びに重要文化財竜光院書院・本堂・盤桓廊・兜門修理工事報告書』	京都府教育委員会	1967.3
『国宝東求堂修理工事報告書』	京都府教育委員会	1965.6
『国宝・重要文化財三寶院殿堂修理工事報告書』	京都府教育庁指導部文化財保護課	1970.10
『重要文化財黄梅院本堂附玄閣修理工事報告書』	京都府教育庁指導部文化財保護課	1976.8
『重要文化財二条城修理工事報告書 第二集』	京都市恩賜元離宮二条城事務所	1956.3
『重要文化財曼陀羅寺書院修理工事報告書』	重要文化財曼陀羅寺書院修理委員会	1966.9
『国宝大仙院本堂附玄閣修理工事報告書』	京都府教育庁文化財保護課	1961.3
『国宝光浄院客殿・国宝勸学院客殿修理工事報告書』	滋賀県教育委員会	1980.6
『円満院宸殿修理工事報告書』	重要文化財円満院宸殿修理事務所	1954.3
『国宝園城寺勸学院客殿重要文化財毘沙門堂修理工事報告書』	滋賀県教育委員会事務局社会教育課	1957.3
『重要文化財護国寺月光殿(旧日光院客殿)保存修理工事報告書』	公益財団法人 文化財建造物保存技術協会	2014.1
『重要文化財妙心寺小方丈修理工事報告書』	京都府教育庁文化財保護課 重要文化財妙心寺小方丈修理事務所	1953.7
『重要文化財妙法院大書院修理工事報告書』	京都府教育庁指導部文化財保護課 重要文化財妙法院大書院修理事務所	1953.3
『重要文化財観音寺阿弥陀堂並書院修理工事調査報告書』	滋賀県教育委員会社会教育課	1955.1

< 図版典拠 >

図 1 筆者作成

図 2 筆者作成

図 3 渡邊晶『日本建築技術史の研究 - 大工道具の発達史 -』中央公論美術出版 2004 p.304

図 4 筆者作成

図 5 筆者作成

図 6 筆者作成

図 7 『円満院宸殿修理工事報告書』重要文化財円満院宸殿修理事務所 1954.3 第六十四圖圓満院宸殿上段の間違柵詳細図より筆者加筆

図 8 『国宝光浄院客殿・国宝勸学院客殿修理工事報告書』滋賀県教育委員会 1980.6 10 光浄院客殿違柵及唐戸構詳細図より筆者加筆

図 9 『国宝瑞巖寺本堂ほか 7 棟保存修理工事報告書』公益財団法人 文化財建造物保存技術協会 2018.3 p.195・6 図 187 墨の絵間南面断面図より筆者加筆

図 10 『国宝東求堂修理工事報告書』京都府教育委員会 1965.6 一三附書院詳細図より筆者加筆

図 11 『国宝本願寺書院(対面所及び白書院)修理工事報告書』京都府教育庁文化財保護課 1959.7 p.26

図 12 『国寶 平等院鳳凰堂修理工事報告書』京都府教育廳文化財保護課 1957.3 竣工平面図より筆者加筆

図 13 筆者作成



より瀬戸内海を中心とした海上交易に興味があった。博多は大陸との交易によって栄えた日本の玄関口であったが、博多から政治の中心である京都へ物資を輸送する際に経由するのが瀬戸内である。瀬戸内と一口に言っても多くの港町があるが、厳島、尾道、鞆、室津などは実際に博多の文書史料の中にも登場し、交易を起点として関係があったことが分かっている。草戸を訪れた背景にはそうした興味に突き動かされたところが大きい。



図2 芦田川と中洲

草戸千軒遺跡が“発見”されたのは昭和初期のことである。瀬戸内海に注ぐ芦田川は大きく蛇行しており、たびたび洪水被害に悩まされていた。当時の建設省による河川改修が計画され、川幅を広げる工事の掘削作業が始まるとそこから次々と陶磁器などが出土した。この河川改修工事そのまま進められたが、この出土遺物に着目した人々によって草戸千軒の発掘は本格化することになる。草戸について文書に残る記述は少ないが近世中期頃の福山藩士宮原直仰の『備陽六郡志』に以下のような記述が残っている。「往昔、蘆田郡、安那郡邊迄海にてありし節、本庄村、青木か端の邊より五本松の前迄の中嶋に、草戸千軒と云町有けるか、水野の家臣上田玄蕃、江戸の町人に新涯を築せける。(中略) 其後寛文一三年癸丑洪水の節、下知而、青木かはなの向なる土手を切ければ、忽、水押入、千軒の町家ともに押流しぬ。此時より山下の民家を建並、中嶋には家一軒もなし」と記されている。この記述を中心に、発見された遺跡は草戸千軒ではないかと推測されることになる。川底から発見されたこの町は発見から約30年経



図3 発掘調査より出土した壁小舞

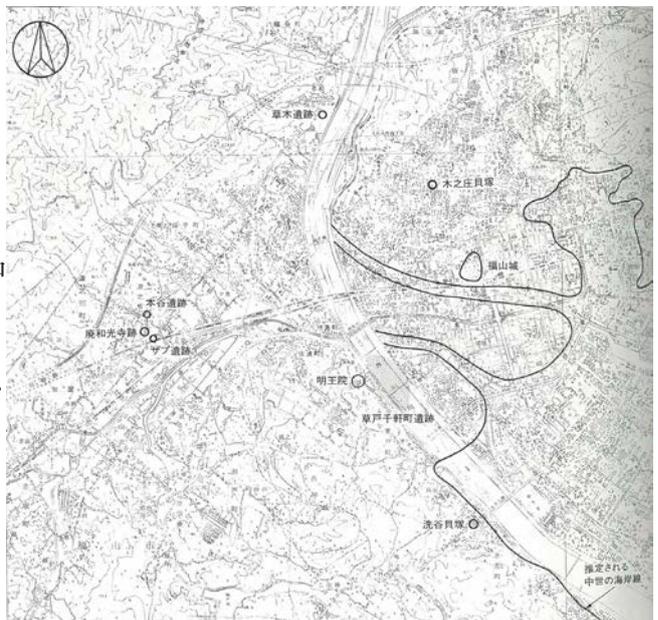


図4 中世期の草戸周辺の海岸線復元（鈴木康之氏による）

過した昭和36年（1961）に試掘調査が開始され、川の流水による困難に苛まれながらも最終的に平成3年（1991）3月末終了の第四五次調査まで行われた。中世期の海岸線を復元した鈴木康之氏によると草戸は芦田川の三角州上に位置していたと考えられる。鈴木氏は草戸の成立について、芦田川を利用した内水面の水運と瀬戸内の海上交通、神辺から尾道へ抜ける陸上交通が交差する重要な場所にあったことを挙げている。

また芦田川西岸の愛宕山には真言宗大覚寺派の中道山円光寺明王院という寺院がある。明王院はかつて常福寺と号していたが、近世期に近在の明王院と合併し寺号を改めたとされる。常福寺の開基は大同2年（807）とされ、鎌倉時代末期の元応3年（1321）に建立された本堂と南北朝期正平3・貞和4年（1328）に建立された五重塔が国宝として指定されている。草戸との関係も文書史料の中の記述から判明している。本堂は本瓦葺の折衷様の五間堂であり、五重塔は和様を基調としたいずれも非常に秀逸な建築である。現在、中世の面影を残すのはこの堂宇のみである。



図5 明王院本堂・五重塔

### 3. 鞆・尾道

草戸千軒遺跡の発見は中世瀬戸内港町の発掘調査を活性化させる契機となった。特に草戸に近い鞆と尾道は積極的に発掘調査が実施されることになった。次にその2つの港町について述べたい。

#### 3-1. 鞆

鞆は草戸の西南、沼隈半島の先端部に位置し、陸地側に窪んだ港を持つ沖合いの備讃瀬戸は瀬戸内海のほぼ中央で東西の潮流の分岐点にあたる。仙酔島、弁天島や大可島などの島々に囲

まれて風波を避けるのに便利な地であったため、内湾に面して町家が立ち並び、古来より「潮待ちの港」として栄えた町である。鞆は万葉集の和歌の枕詞にも登場するほど歴史は古く、源平期、鎌倉時代を経て南北朝期には戦略上の要衝として重要な拠点となる。室町時代にはさらなる繁栄を遂げたとされ、製鉄や造船を主産業として、また朝鮮との交易なども行っていたと伝わる。近世以降も公式の海駅として、諸大名・朝鮮通信使の往来において重要な役割を担っており、川底に没した草戸と対照的である。

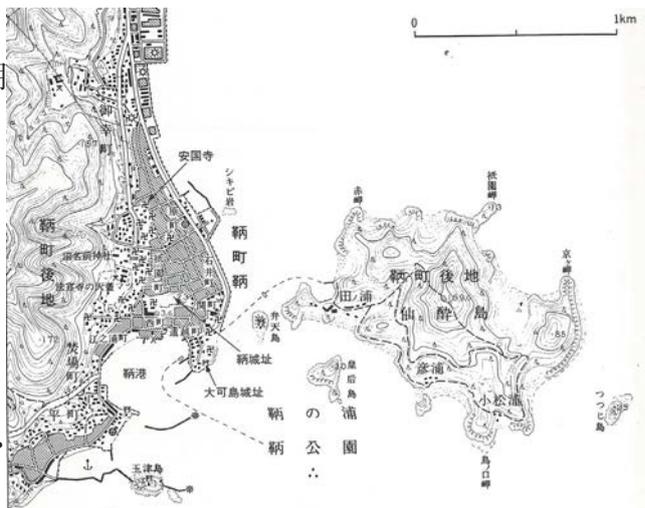


図6 鞆



図7 鞆（高台より仙酔島の方向を撮影）

### 3-2. 尾道

尾道は尾道水道に面する瀬戸内海屈指の港町である。浄土寺山・西国寺山・千光寺山に囲まれ、瀬戸内海に面する南側に向島があることで防波堤の役割を果たしてしてくれることから、天然の良港として栄えてきた。



図8 尾道（高台より尾道水道の方向を撮影）

平安時代の平氏の隆盛期に見出され、倉敷地として整備される中で港湾機能を整えてきたとされる。また尾道は「寺の町」とも知られており、中世には浄土寺が栄え、近世は毛利氏の支配下の中で重要な港町として繁栄した。

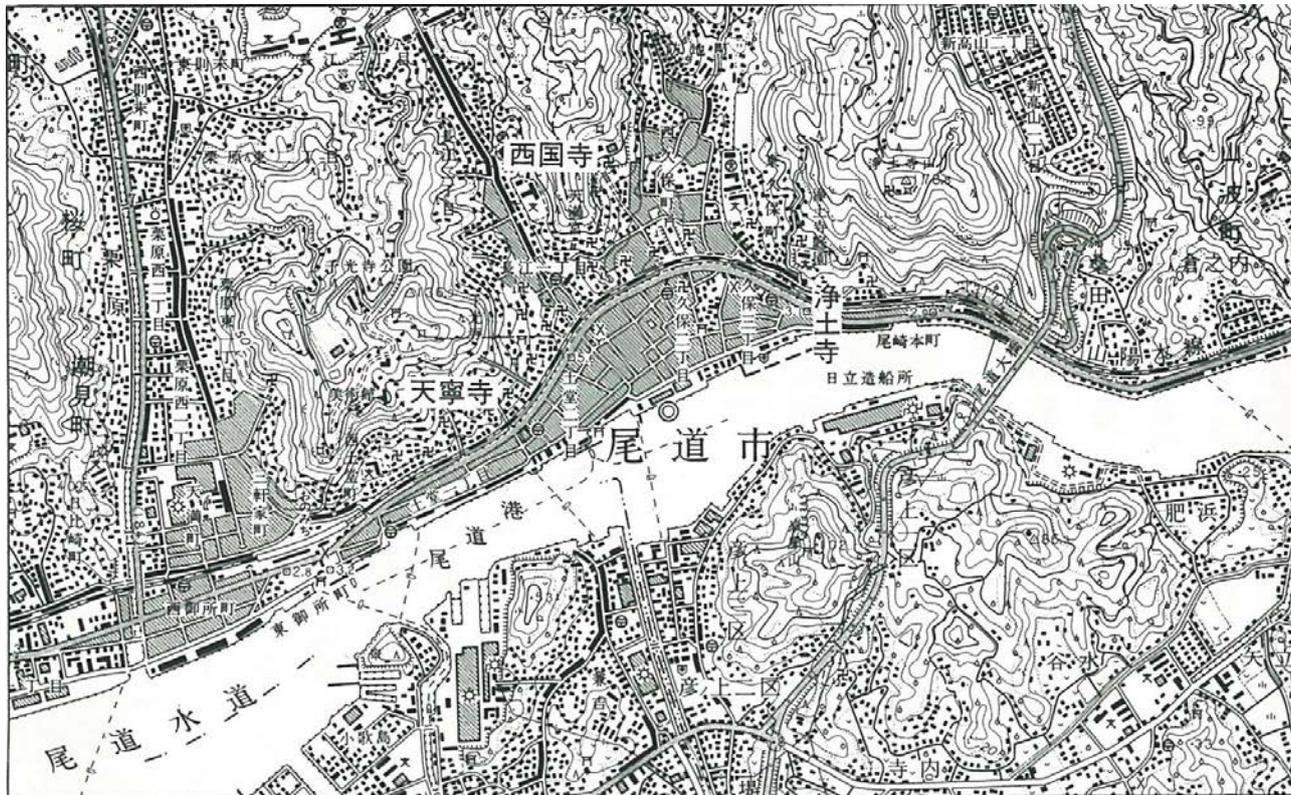


図9 尾道



図10 尾道浄土寺（手前から多宝塔・阿弥陀堂・本堂）

尾道の浄土寺に残る国宝の本堂（嘉暦2年（1327）建立）と多宝塔（嘉暦3年（1328））、重要文化財の阿弥陀堂（貞和元年（1345））を中心に伽藍が構成されており、今もなお中世期の面影を強く残している。

#### 4. 草戸・鞆・尾道を訪ねて

私は草戸と明王院を見学した後に鞆を訪れ、翌日尾道を歩いた。鞆と尾道は同じ瀬戸内海に面した港町であるがその内実は大きく異なる。それぞれが果たしてきた役割が異なる故に当然ではあるが、単純に一括りにできるものではなくそれぞれの魅力がある。同じように見えるが実に多様な都市模様がそこに見えかくれするのが港町の魅力なのかもしれない。もし草戸が現代まで残っていたら芦田川中洲はどのような景観であっただろうか？

今になって振り返ると瀬戸内での体験はその後の研究姿勢において重要な意味を持ったと思う。対象とする都市を比較相対化することの面白さを学んだし（実際に修士論文にて博多と九州北部の他都市を比較しようと試みたが、これはあまりうまくいかなかった）、研究対象を一つに限定することのもったいなさを強く感じた。

草戸を訪れた翌年、博多と縁の深い備前長船を調査し、その時も瀬戸内の魅力を強く感じたものである。今回は非常に雑駁な文章になってしまったが、未だ瀬戸内への興味は尽きず、いずれ改めて研究にも着手してみたい。

#### < 参考文献 >

網野善彦・石井進・福田豊彦編『よみがえる中世【8】埋もれた港町 草戸千軒・鞆・尾道』1994.12 平凡社

#### < 図版典拠 >

図1…上記参考文献 P.219 より引用

図2…筆者撮影

図3…上記参考文献 p.129 より引用

図4…上記参考文献 pp.38-39 より引用

図5…筆者撮影

図6…上記参考文献 p.173 より引用

図7…筆者撮影

図8…筆者撮影

図9…上記参考文献 p.189 より引用

図10…筆者撮影

後記・執筆者略歴

Postscript

\* \* \* \* \*

★「史標」の復刊以来、寄稿せずにいましたが、卒業前に寄稿させていただく機会をいただき、感謝致します。本論考は、今年度纏めた修士論文で考えていたことを整理したものです。拙い論考ではありますが、これからの研究の足がかりとなれば幸いです。

関根康季  
1994 年生まれ / 2017 年早稲田大学創造理工学部建築学科卒 /  
2017 年同大学院創造理工学研究科建築学専攻在籍 /  
主な論文：面砕の変遷と実践的設計の関係 - 住宅遺構を「実践」と捉えた分析を通して -

★ 2018 年度は史標に一年通して参加させていただき改めてお礼申し上げます。今回はこれまでの趣向を変えて昔考えていた瀬戸内港町のことを思い出しながら書きました。博士課程では近代インフラの研究を扱っていますが、やはり港町は良いな、と感じる今日この頃です。

伊藤瑞季（略歴は第 60 号に掲載）

お知らせ  
Submission

○「史標」原稿募集規定

本誌への投稿を歓迎いたします。論文、報告、書評、人物紹介、随筆等、内容は自由。建築学以外の論考に關しても可。以下の連絡先までご連絡いただければ、フォーマットテンプレートをお送りいたします。原則として、偶数ページにおさめることとし、図版には典拠、キャプションを付加してください。また、執筆後期(210文字以内)、略歴(124文字以内)のご送付もお願いいたします。

○質疑・討論原稿募集規定

掲載原稿に対する質疑や、討論の申し込みも受け付けております。ページ数は自由で、その他の原稿の形式に關しては上記のものと同一で構いません。提出期限は随時。多数のご質問・ご批評をお待ちしております。

○お問い合わせ

〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1  
早稲田大学西早稲田キャンパス55N号館8階10号室  
建築史研究室内 O. D. A.「史標」出版局  
TEL: 03-5286-3275  
FAX: 03-3204-5486  
Mail Address: shihyo@lah-waseda.jp

「史標」第63号

2019年3月号(2019年3月31日発行)

編集: 大和祐也、高田圭祐

〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1  
早稲田大学西早稲田キャンパス55N号館8階10号室  
建築史研究室内 O. D. A.「史標」出版局  
TEL: 03-5286-3275  
FAX: 03-3204-5486  
Mail Address: shihyo@lah-waseda.jp

「史標」第 63 号（2019 年 3 月号） O. D. A.「史標」 出版局発行